

わが心の遍歴

(4) 参禅(FAS禅と伝統禅)

花岡 永子



誰よりも元気であった夫が亡くなって、呆然としていた頃、悲しみを忘れて何かに打ち込むように、とのお心配りであろう、それまでご指導くださった先生方や周りの方々が色々仕事を与えて下さった。

先ず武内義範先生が浄土真宗のご住職をしていらした四日市のお寺に、1週間程お招き下さった。先生の日本語のご論文をドイツ語に翻訳するように、というご依頼であった。お訪ねしてみると、翻訳はほんの僅かで、実際には先生の大きなお寺を先生と御奥様と一緒に見て頂き、お寺の大きなお庭で、薩摩芋を少し掘らせて頂いたり、大きなご尊宅の大きな書庫を見せて頂いたりして、生きる力を付けて頂いたのがあった。帰宅する頃には、何とかが生ける勇気が湧いてきていた。全く思いも掛けない先生と御奥様のご配慮に、今も尚、心は大きな感謝の念で一杯である。ご尊宅ではキリスト教神学者のR.ブルトマンやP.ティリッヒ等が先生のお家を訪問された際の色々な議論や珍しいお話を聞かせて頂くこともできた。その1週間にはその後の現在迄の筆者の人生に色々参考になることを沢山お教え頂くことができた。

また、西谷啓治先生からも先生のお書きになった「ゲーテと世界文学」のドイツ語への翻訳を承ったりした。しかし私の人生を大きく転換させることができたのは、西谷先生から承ったドイツの神父様の著書を日本語に翻訳する仕事であった。それは、ドイツのボン大学のH.ヴァルデンフェルス教授著「Absolutes Nichts」(絶対無: 西田哲学の用語で、神は絶対無と理解されている。絶対は絶対の自己否定を、無は無実体を意味する)の後半部分の翻訳であった。これは、西田哲学、田辺哲学、西谷哲学の研究書であったので、ドイツ語を通じて幸いにも、難しいこれら三哲学者の哲学を学ぶことができた。それのみならず、そこには禅の詳しい解説も入っていた。その上、ヨーロッパのカトリック神学者の眼を通しての大乘仏教理解は、ヨーロッパでプロテスタント神学を学んできた筆者には、西田哲学や田辺哲学を直接に学ぶよりは、遙かに理解し易いものであった。

1.FAS協会への入会

夫の亡くなった翌年の1978年に、先ずFAS協

会に入会した。京大の文学部時代にP.ティリッヒの講読で2年間お世話になった阿部正雄先生のご紹介であった。FAS協会は、久松真一博士によって、第2次世界大戦敗北直前に京都で学生の仏教求道者を中心にして創設され、今も尚、存続している仏教協会である。FASは、Formless self, All humankind, Suprahistorical history(無相の自己、全人類、超歴史的歴史)のそれぞれの頭文字である。

FAS協会には3年間通い続けた。外国人もいつも数人参加していた。その中には現在既に大学の教授になられた方もいる。その間のFAS協会の責任者(指導者)は、花園大学の常盤義伸先生であった。FAS協会には、平田精耕老師様や今は既に亡き藤吉慈海先生が、また辻村公一先生や柳田聖山先生も会員としてご在籍であった。土曜日毎の例会や年3回の接心においての論議は、実に活発なものであり、色々な意味において生涯忘れることのできないものであった。花園大学(山田)無文館の2階の座禅堂でも接心が、この3年間に幾度か開催された。

また妙心寺の霊雲院ではその頃、冬の1週間の接心があり、3年間で3度参加した。凍てつくような荷物だらけの物置に、女性数人で2~3時間の夜の睡眠をとったことも、懐かしい思い出となっていた。ある夜等は、畳20枚位を縦に積み上げた上に筆者が眠り、その下の1畳位の隙間にドイツの修行中の女性が眠る羽目に陥ったこともあった。もし筆者が畳一畳の上で万が一にも寝返りを打って落ちることがあれば、下に寝ている方は、致命傷を受けることは必至であった。寝相の悪い筆者には、正にそこで無事に一夜を過ごすことこそが修行の第一歩であった。

また、忘れることのできない接心としては、竜安寺での接心が挙げられる。それは、竜安寺の畳の間から石庭を目の前にしての、花園大学主催の特別な接心であった。その夜は、丁度仲秋の月名の会であったので、修行中の誰にとっても、正に「天地同根、万物一体」にして、同時に「天上天下唯我独尊」の経験が可能となるような夜に思われる程に、美しく、清々しかった。その経験は、今でもそのまま、筆者の心に生きている。

座禅を始める数年前から読みはじめていた、

花岡 永子(別姓:川村 永子)/はなおか・えいこ
1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学、'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神科学博士候補生コース留学、'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年師家(しけ)の印可証を授けられ、女性の老師となる。'96年には京都大学より文学博士号を授けられる。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化学研究科教授として哲学、宗教学を教える。著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『禅と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キュルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

大森玄玄著の『参禅入門』や山田無文老師の禅関係の書が実際に大いに役立った。それのみか、山田無文老師や大森玄玄老師は、FAS協会で修行中に、筆者が就職した花園大学の学長でもあられた。色々な偶然の幸運が重なった。H.ヴァルデンフェルス教授の翻訳もこの期間に成し、すべてが禅へと収斂していくようになっていった。研究会では、西谷啓治先生が顧問をなさっている「西田哲学研究会」で西田哲学を読み、1981年から1992年までは、平田精耕老師様が代表者で、西谷先生が顧問(1981-1990)であられた京都府シンポジウムで禅の研究をさせて頂いた。偶然とは言え、大変に恵まれた境遇で、生死を越えて個の自己と万物の自己との一体の境涯に生きることができるようになると、生涯続く修行の旅に、何はともあれ出かけることができたのは、どんなに感謝しても感謝し切れないことであった。

しかしFASに入れて頂く時に既に、将来は是非とも相国寺(しょうこくじ)の専門道場で修行したいという希望を持っていた。久松真一先生は、伝統的なお寺の内部で行なわれてきた4500程ある公案を、ただの一つの公案に纏(まと)められた。「どうしてもいけなそうとすれば、どうするか」という一つの公案に、である。しかも指導者の老師もいないという新しい考えをおしになった。しかし、創造的なものは、どのような領域であれ、伝統を踏まえたところからしか出てこないのではないかな。勿論、時代と共に、参禅の方法も人間のあり方も、またものの考え方も変化するところであろう。しかし先ず伝統から学ぶことをしないならば何事も長続きはしないであろう。

そこで、学生時代以来ご指導頂いてきていた西谷啓治先生の修行されていた相国寺で何とか参禅させて頂きたいという希望を最初から持っていた。女人禁制の道場であったために、筆者の参禅については色々な問題があったようであるが、西谷先生のご推薦でその願いも叶(かな)い、間もなく相国寺管長の梶谷宗忍老師様に相見することができ、弟子入りすることができた。正に「タベに死すとも可なり」の思いが強いわけではなかった。しかし、やっと伝統禅の流れの中で修行が可能になっただけで、道が何であるかは未だ分からなかった。それに、修



1996年春のハンブルクのダムトア駅前にて。
向かって左が、竹内義範先生、右側は筆者。



1994年夏、スイスのある修道院にて。
向かって右が、H.ヴァルデンフェルス先生、中央は筆者。

行もしないで死ぬことは全く許されないことと思い、数年間、来る日も来る日もただ独参に通い続けた。

2. 因陀羅の網

長い独参の日々から、道とは、「真の自己とは何か」に覚えて、ただ無心に生きることを意味することが分かった。このことは、華嚴経の中の、因陀羅網(いんだらもう。「帝釈天の網」ともいう)の譬(たとえ)によって説明することが最も適切であろう。この譬えとは、悟りの世界には因陀羅の網が掛かっていて、その網の各々の結び目には珠玉があり、それらの珠玉は相互に映し合い、相互に映った珠玉は、丁度鏡と鏡が映し合っているように、さらに相互に映し返し合っていて、その映し合いの関係が無限に続いていくものである。丁度この譬えにおいてのように、私たち人間は、すべての人々と動植物や物と相互に全存在を映し合いながら生きている。そして、一々の人や動植物や物は絶対の中心であると同時に、周辺でもあるという仕方で生きているということとを「自ずから然(し)かる」(自然な)「道」として生きているというのが、この譬えの意味していることであろう。

ところで、哲学者(正確には哲学以前にして哲学以後の世界をも含めて、思索するのみならず、それを生きる哲学者としての「宗教哲学者」)は、この事実を自覚しなければならぬ。しかしこの世で生きていくためには、先ずこの道が「自ずから然かる」という意味で自然に日々生きられることが肝心なことであると理解される。宗教哲学者は、この事実を説明しないし反省し、他の諸科学や生活領域との関係を関連づけなければならない。しかし、すべての人が宗教哲学者になるわけでもないから、またならなければならないわけでもないから、先ずそのような境遇で生き得ることが大切である。もしそのような境遇で生きることができれば、諸科学も諸生活領域も、根本的に変わっていくことであろう。

3. 伝統禅

お寺の伝統の中での制度に従った所謂(いわゆる)伝統禅での修行でも、貴重な経験が与えられた。FAS禅においても伝統禅においても、先ず結跏趺坐(けっかふざ)といって、胡座(あ

ぐら)をかけた状態で、先ず右足を左足の太股の上に足の裏を上に向けて載せ、その後で左足を右足の太股の上に載せ、背筋を真っ直ぐにして、呼吸を整え、無心に瞑想するのが座禅の修行の基本である。しかし、椅子や切り炬燵で育った筆者には正座も満足にはできなかったで、最初の3か月間は半跏(はんか)といって、片足しか組まない状態で座禅する仕方があるが、そのような仕方では座るのが精一杯であった。その後、やっと正式に結跏趺坐することができるようになって、30分間の経行(きんひん=座禅中の30分ないし1時間毎の5分程度の歩く運動)のために立ち上がる時には、痺れのために足に感覚がなく、爪先立ちにしか立てず、直ぐにスッテンコロリンと引っ繰り返ることが多かった。無事に座れるには1年以上の年月が必要であった。

しかし、座禅は必死であった。夫の死後は、自らの体が丁度半分無くなったようで、真っ直ぐ歩けない程、平衡感覚も失われていた。昔、学生時代に読んだ夏目漱石の短編小説「硝子(ガラス)戸の中」に出てきたある老夫婦の心の内の思い(この年で相手が亡くなれば最早一人では生きていけず、直ぐに死んでしまおうだろうという思い)を思い出したりもした。何はさておき、ただ自己として生きられるようになれば、どんなに引っ繰り返っても構わなかった。しかも、夫との生活が終わった限り、ただ生きるの、もうたくさんであった。真の自己として生きたいという思いだけであった。その間の、西谷啓治先生が顧問であった西田哲学研究会の読書会は、座禅の大きな助けとなった。

心配していたお寺も、中に行けば行く程、女性差別は無かった。真の自己に目覚めようと努めている人々が多く、気持ちが悪々とするのみであった。老師様に「命をかけて座禅をしたい」と思っている優秀な女性がいれば、紹介して下さい」とまで仰って頂く程に、お寺の中は開けていた。実際、4、5人の優秀な女性をご紹介したのであった。しかし、色々な事情で、その当時一緒に修行した筆者以外の女性は、残念ながら座禅を相国寺で続けることができなかった。参禅は、やはり大変に厳しかった。真の自己に目覚めることを、自らの生きる第一の関心事としない限り、その目的は、当然のことながら、不可能なのであろう。

伝統禅で修行をされた先生方の中には、FAS禅に理解を持たれる方々が幾人かいら(5人)。西谷先生、辻村先生、平田精耕老師様や花園大学に教授として赴任して来られた秋月龍(りょうみん)老師様方がそうであられた。伝統禅とはいえ、FAS禅とは何か親戚関係にあるような近しさで、色々と両者の関係について、前もって、理論的にのみならず、修行中にも、またその後の生活においても、両者の修行方法の比較も自らできるので、両者の禅を経験し得たことは、その後の自らの歩みにとっても大変良い道であったと思われる。

世間の判断とは逆に、伝統禅にも柔軟な道があり、FAS禅にも我流に陥る危険もあることが、自らの道の歩みの中で明らかとなったことは感謝すべきことであった。勿論、その逆の例もあり、要するに、自らが真剣に道に励まなければ、いずれの禅であれ、道を外れる危険は常に存することは言うまでもないことである。

4. 禅での歩み

禅の修行を始めてからの禅に纏わる大きな出来事といえば、1992年8月にアメリカのロサンゼルス禅センターとニューヨーク州の山奥にある大菩薩禅堂金剛寺に出かけたことや、1997年8月にオランダのDe TiltenbergでのFAS協会の会議や接心に出かけたことである。今回は、前者の米国の旅を振り返ってみたい。

1992年にはボストン大学で、東西宗教交流学会が国際的な規模で開かれた。日本の東西宗教交流学会からも多くの方々が参加された。筆者も花園大学を中心とした京都禅シンポジウムから参加し、発表をした。前者からは、秋月龍老師様も発表された。その当時既に花園大学の教授であられた秋月老師様から、「脳溢血(のういつけつ)の発作の後で健康が心配故、米国で夏休みを過ごされている東横貿易の社長様やそのご家族の皆様、あちこちの禅センターに連れて行って貰うが、この旅に皆さんと一緒に来てくれませんか」という意味のお話があった。筆者にも全く健康の自信はなかったのであるが、脳溢血も7、8年前に半身を不自由にされたご経験も伺っていたので、皆様と一緒させて頂くこととした。